

カトリック・ゾルブ 同化に対するゾルブ民族の最後の砦

中村 浩平

はじめに

ドイツ連邦共和国のブランデンブルク州およびザクセン州にわたって、ゾルブ人（あるいはヴェント人）と呼ばれるスラブ系の少数民族が住んでいる。この民族はスラブ系最小の民族集団と言われ、現在その人口は6万人であり、そのうち2万人がブランデンブルク州の南東部地域、すなわち下ラオジッツ地方に、4万人がザクセン州の北部地域、すなわち上ラオジッツ地方に住んでいる。この人たちはゾルブ語という固有の言語を持ち、下ラオジッツ地方では下ゾルブ語を、上ラオジッツ地方では上ゾルブ語を話している。下ゾルブ語はポーランド語に、上ゾルブ語はチェコ語に近いと言われているが、さらに両者を繋ぐものとして中間地帯に過度言語としての方言がある。

彼らがこの地に移り住んできたのはおそらく5～6世紀頃と言われている。エルベ/ザール河とオダー/ナイセ河に挟まれた地域には元々ゲルマン諸部族が住んでいたが、広範囲にわたってこの地を引き払った後に、スラブ諸部族が移り住んできた。しかし時代の経過と共に18世紀以降は2つの部族だけが残り、他のすべての部族は徐々に消滅するか、あるいはドイツ人に吸収され同化されてしまった。この残った2つの部族とは下ラオジッツに定住したグループ（Luzici）と上ラオジッツに定住したグループ（Milceni）である。これが今日のラオジッツ・ゾルブ人の祖先である。以来彼らはこのラオジッツと呼ばれる地に、後にこの地に移り住んできて彼らをその支配下に治めることとなるドイツ人と共存して今日に至るまで生き延びてきた。従って彼らはドイツ国土における最後の生き残りスラブ系民族である。しかも彼

らはかつて隣接の同じ西スラブ系のポーランド人やチェコ人あるいはスロヴァキア人のように、独自の国家を造ることはなかった。およそ1000年以上にわたってドイツ人支配の下でドイツ人と混在して生きてきたのである。

しかし近年この歴史の中を強かに生きてきたゾルブ人の住民数が減少の傾向にある。そしてこの傾向はゾルブ民族にとってはその存立を掛けた由々しき事態である。その原因は一体何なのか。それにはいろいろの要因が考えられるが、その主要な原因はやはりゾルブ人がドイツ人になる脱ゾルブ人現象、いわばドイツ人への同化現象に他ならないといえる。

歴史的にはかつてゾルブ人に対してプロイセンによるゲルマン化とナチスによるドイツ人化があった。プロイセンの同化政策は、とくに1871年以降、学校でのゾルブ語使用の撤廃、公用語としてのゾルブ語の不承認、さらにドイツ語の導入、すなわち単一言語の強制、ゾルブ人聖職者をドイツ人聖職者によって置き換えることなどであった。このようにしてゾルブ人世界からゾルブ語の一扫を図った。つまりゾルブ人がゾルブ語を話さなくなり、あるいは話せなくなることを意図したのである。

同様にナチスもゾルブ人の民族意識を除去することによって脱ゾルブ人、すなわちドイツ人化を目論んだ。そのためとくに聖職者と教師に的を絞り、その排除、追放を行った。そのことによってゾルブ人の精神生活（宗教生活・文化生活）の基盤を取り除こうとした。こうして教会から、学校からゾルブ語が消えた。ナチスのイデオロギーは自民族を支配民族として規定し、ゲルマン民族の優越性を示すものとして単一言語、単一文化、単

一血統をイデオロギー実践の中核においた。その民族観はそれゆえ極めて偏狭で狂信的な観念であった。しかもこれを支配した他民族に強制しようとしたのである。

プロイセンもナチスもいずれの場合もその政策の狙いはゾルブ人からゾルブ語を奪うことによつて、ゾルブ人としての民族意識を奪い、そのアイデンティティを消滅させることにあった。そしていずれにせよこれらの場合は上からの強制によるものであった。

しかし近年に起きている同化現象はもちろん強制的なものではない。むしろ川が高いところから低いところへ流れるように、いわば自然の成り行きで、自然現象とも取れるのである。つまり人々の自発的意志および選択に基づいて起こっている。それだけに事態は深刻であると言える。

そしてこの同化現象はプロテスタントが多数を占めているいわゆるプロテスタント地域で顕著に見られると言う。下ゾルブ語を話すラオジッツ地方はプロテスタント地域である。上ゾルブ語を話す上ラオジッツ地方は、4万人のうち1万5千人がカトリックで、残りはプロテスタントである。従つて3倍の人口をもつプロテスタントが多数派であり、カトリックは少数派である。多数派を占めるプロテスタント地域で同化現象が進んでいることは、それゆえゾルブ民族全体の将来にとって由々しき状況である。プロテスタント・ゾルブの大部分の人々はその信仰や民族性との結びつきがあまり強くないという。¹⁾

他方、少数派のカトリック・ゾルブ地域では同化現象はそれほど見られないという。ゾルブ人の同化現象が進む中でなぜカトリック・ゾルブ地域では同化現象がそれほど進んでいないのだろうか。ヴィティヘナオ、バオツエン、カーメンツに囲まれた三角地帯はカトリック・ゾルブの住民が多数を占めている地域、つまりカトリック・ゾルブ地域である。

この地域のある上ラオジッツ地方はもともとカトリック・ゾルブの人たちが住む土地であり、とくに農村部ではゾルブの伝統様式(宗教行事・習俗)を守りながら、教会を中心として日常生活を営んできた。ここではカトリック信仰とゾルブ民

族意識が分かちがたく結びついていて、いわば彼らのアイデンティティを形成していたのである。彼らにとってカトリック信仰は精神的バック・ボーンであり、教会は心の拠り所であった。そして今日でもこの人たちは教会を中心として従来の生活習慣を守って生きている。「カトリズムとゾルブ民族性はここでは1つの現実のもつ2つの際立った側面」²⁾なのである。ここに同化を食い止めている要因があるのではないだろうか。

民族固有の言語はその民族のアイデンティティを支える柱である。従つてその言語を失えば、民族の存立は失われるといえる。ゾルブ民族の場合には、下ゾルブ語は、とくに若い世代で、生きている言語から死滅への過程にあるという。上ゾルブ語でもプロテスタント地域では使用の低落が見られるという。まさにここに同化現象が起きている要因がある。それに反してカトリック・ゾルブ地域では多くの村々で今日でも上ゾルブ語は日常生活で話され、教会のミサで使用されている。ここにも同化を食い止めている要因があるのではないだろうか。

同化はゾルブ民族の存立を危うくするものである。従つて同化の進行を食い止めることがゾルブの人たちにとってゾルブ民族存立の緊急課題である。ゾルブ人の同化現象が進む中でカトリック・ゾルブはゾルブの民族性をなお保持していると言えるが、これとて万全とは言い切れない。しかし、この人たちがゾルブ語を家庭や学校や教会で依然として維持できるメカニズムが今なお働いていることは、少なくとも同化現象に歯止めをかけていることと無関係ではないであろう。

このように今日でもゾルブ語を維持していること、ゾルブ固有の宗教的伝承を保持していることなどがカトリック・ゾルブ地域での同化を弱める働きをしていると考えられるが、本論では以下、まず歴史的にゾルブ人に対して最も同化を強制したナチスの政策、次いでそのナチスに対してゾルブ人としてキリスト者として敢然と戦って倒れた若きカトリック聖職者に触れ、さらにカトリック・ゾルブ地域の中でゾルブ語を維持しているメカニズム、教会、習俗(伝統行事)等を手がかりにして、同化を押し止めていると思われる要因を

探ってみたい。

1. 同化の歴史的背景 とくにナチスの同化政策について ³⁾

ナチスは1933年に政権を掌握すると直ちにゾルブ人を暴力で画一化しようと企て、ゾルブ人指導者やゾルブ語出版物に対して行動を取った。ラオジッツにおいて広範な検挙が開始された。多くの者たちが逮捕され、追放された。ゾルブ語使用の禁止、ゾルブ諸組織の活動を停止させようとする試みが続き、ゾルブ人の文化的・政治的生活は停止状態に至った。ナチスによる措置はゾルブ民族の全生活領域に及んだ。しかしゾルブ人の民族意識を根絶しようとして彼らに対してテロを用いたが成功しなかった。さらに外国から抗議の波が起こり、スラブ諸国でゾルブ民族との連帯運動が展開された。そこで1933年夏にナチスはゾルブ住民に対してその戦術を変えた。つまり、ゾルブ民族に対してナチズムのイデオロギーを身に付けるように求める戦術転換をしたのである。ゾルブ民族は外国に向けて「大ドイツ民族の生き生きとした一部分」⁴⁾して宣伝された。

1935年にテオドア・オーバレンダー博士の下にある「ドイツ東部連盟」がゾルブ人の活動を制限する特別な使命を持ってラオジッツに到着した。さらにゾルブ問題にヒムラーが大きな関心を抱き続けたので、ナチのイデオロギーの圧力は強化、増大することとなった。1936年から1937年にかけてナチスはゾルブ語の刊行物とゾルブ人の文化および社会活動を禁止した。ゾルブの主要な文化機関「ドモヴィナ(故郷)」(Domowina)は、民衆に幅広いベースをもっていた唯一の機関であったが、若い教師パヴォル・ネードの巧妙な指導のもと「ラオジッツ・ゾルブ連盟」に組織換えをして、難を逃れた。連盟は『ゾルブ語を話すドイツ人』としてナチスの支配構造に統合されることに抵抗した。ナチスの要求する『ゾルブ語を話すドイツ人』という用語をその規約の中に入れるのを拒否した結果、1937年春に「ドモヴィナ」は禁止された。⁵⁾ その直後にゾルブの新聞は発行を停止せざるを得なくなった。ゾルブ語の主要な新聞Serbske Nowiny(ゾルブ・ニュース)と他のす

べての出版物は、カトリックの新聞Katolski Posol(カトリック・ヘラルド⁶⁾)を除いて発行停止となったが、この最後に残された新聞も1937年7月に廃刊となった。

1938年末までに学校でのゾルブ語の授業は中止され、公共でのゾルブ語の使用は禁止された。1940年末には政府の命令によりゾルブ人カトリック神父12名とプロテスタント牧師11名が職を解かれ全員ラオジッツの地から立ち去ることを余儀なくされた。⁷⁾ゾルブ運動の活動家は全員が国家の敵対者と見なされた。多数の指導者たちが逮捕され、「国家反逆罪」で告訴され、刑に服した。ゾルブ人教師25名が国内の他所へ強制移動させられた。3人のゾルブ人カトリック神父がダハオ強制収容所へ強制移送された。⁸⁾

ナチスはとくにカトリック神父とゾルブ人教師を全員この地域から排除し、追放することによつて、ゾルブ人の精神的基盤を切り崩そうとした。⁹⁾ そうすることで彼らから民族意識を取り除き、脱ゾルブ人、すなわちドイツ人化をはかった。ゾルブ人神父と教師のいなくなったゾルブの村落では、「ヒトラー・ユーゲント」や「喜びによる力」などのナチスの諸組織によってドイツ民族になるための運動が強力に推進された。ナチの婦人組織はカトリック・ゾルブ地域にとくに集中して運動を行った。¹⁰⁾ これらの運動は、ラディカルなナチのイデオロギーと結びついて、とりわけゾルブの若者たちの間に短期間でゾルブ語の積極的な使用を著しく低下させ、ゾルブ人としてのアイデンティティを徐々に掘り崩させる結果をもたらした。

ゾルブに対するナチスの政策は一般的にスラブ人は劣等民族であるという見方に支配されていた。従つてゾルブ人を劣等市民として扱い、ドイツ人から独立した民族的アイデンティティを主張するいかなる試みも制限することが必須とされた。しかし他方でナチスはゾルブ人を、ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人と同じように、ドイツ人化の第一優先順位にあるとした。というのは、ドイツ人との混血がかなり進んでいたため、ドイツ人と密接な近似関係にあると見なしていたからである。ナチスはまたゾルブ文化が強く地方の伝統をもつ農民共同体に根を持っている側面を

賞賛した。ヒトラーでさえ1933年に伝統衣装を纏った下ゾルブの少女グループと写真を撮っている。また多数のゾルブ人がナチ党员であったのも事実である。このようにあまりにも一定しないゾルブ人の取り扱い方は、ゾルブ問題に関してナチの指導者間で意見の一致がなく、¹¹⁾ ナチのゾルブ政策には基本的な矛盾が当初からあったことを示している。

しかし1936年以降、ゾルブ政策の主眼はラオジッツのスラブの特色の根絶に置かれた。¹²⁾ 「ゾルブ人」という言葉やゾルブ語は公から姿を消し、公共の記念碑にあるゾルブ語の文字も除かれた。多くの地名がドイツ語化された。同時にゾルブ文化のなかでスラブ起源のものは否定されるべきものとなった。若干の科学者は、その中にはプレスラオのヴァルター・シュテラーがいたが、ゾルブ人はスラブ人ではなく、民族大移動の時にスラブ人がこの地方に定住したとき故郷を立ち去らなかったゲルマン部族の子孫で、ゾルブ語を話すドイツ人にすぎないと言うテーゼを立てた。¹³⁾ ゾルブ人が彼ら固有のものであると見なしている習俗は実際は古いゲルマンの習俗であるという方針を打ち出し、1936年に内務省のある高官がそれに従うべきであると命じた。ナチのイデオロギーは従って最も極端な形でゾルブ民族を文化的にも支配しようとしたのである。つまり、ナチスの狙いは、独立した民族共同体としての彼らの存在を否定し、公共生活からゾルブ語とゾルブ文化を強制的に排除して、同化過程を促進させることに他ならなかった。

それに対して大多数のゾルブ住民の反応は従順そのものであり、体勢順応であった。彼らはマジョリティであるドイツ人への同化とゾルブ人としてのアイデンティティの保持の間にそれほど葛藤を持つこともなかった。しかも中にはナチの政治やイデオロギーの特殊な要素に熱狂的に魅了された者もいた。しかしまた同時に、少数派ではあったが、政治的にゾルブの民族意識に目覚め、ナチスに抵抗する人たちがいた。彼らの多くは世界観も違い、政治信条も異なっていたが、抵抗運動または反ナチ地下運動のために逮捕され、強制収容所や刑務所で苦しみなながらも、そこでもさらに非

合法活動を続けた。そしてそのために命を落とした者もいた。さらに、ほとんどはポーランドかチェコスロヴァキアであったが、亡命した者たちがおり、亡命先で反ヒトラー活動を続行した。

親衛隊全国指導者ハインリヒ・ヒムラーはゾルブ問題に並々ならぬ関心を持っていて、ライプツィヒの人類学者で民族学者オト・レヒェがゾルブ人をポーランド人と同系のスラブ民族集団に分類した見解に従い、1940年5月にゾルブ人住民を他のスラブ系少数民族とともにポーランドの総督領へ強制退去させる計画を作成した。¹⁴⁾ ヒトラーはヒムラーの計画を「非常に良くかつ正しい」ものとして評価したが、しかしヒトラーはいかなる移動も最終勝利後まで待機すべきであると決めた。ヒムラーの1940年5月の意見書「東部における異民族の処置」によると、ゾルブ民族や他のスラブ諸民族は「指導者をもたない労働民族としてドイツ民族の厳しくかつ公正な指導下で、ドイツ民族の永遠の文化行爲と建築物の構築に協力するよう使命づけられている」ことになっている。¹⁵⁾ この極秘記録ではスラブ諸民族の根絶が目標として率直に提示されている。

しかしラオジッツの各地では人種政策による検査作業が、ナチスの科学者も加わって行われた。彼らは、ゾルブ人はドイツ人の血統を引いていることを証明しようと苦心し、ゾルブ人の「確実な」定義の判断基準を多く作り出した。これまでドイツ人への同化にこだわるのは一体なぜなのか。完全にドイツ人化したユダヤ人を強制収容所へ送る一方で、ゾルブ人をなんとしてもドイツ人化しようとするのは大きな矛盾であろう。

ラオジッツではヒムラーの意見書の実現化へのあらゆる準備が計画通り進められたにもかかわらず、最終的に実現されることはなかった。¹⁶⁾ 戦争が終末に近づいた頃、ゾルブ人のアルザス・ロレーヌへの移住に関する論議がさらに起こったが、この時も行動に移されることはなかった。このようにナチスのゾルブ人に対する政策は、指導者間の見解の対立からでているのかどうかは不明だが、同化政策から移住政策までのあいだで揺らぎが見られる。ナチの人種政策の最高責任者はホロコーストを遂行したヒムラーであるが、彼のゾル

ブ人に対する政策、すなわち移住政策は実現されることはなかった。その間もラオジッツの現場ではむしろゾルブ人に対して同化政策がとられていたのである。

そこで次にこのようなナチスの同化政策に反対してゾルブ人として、キリスト者としての立場からナチ政権の打倒を目指して抵抗したアロイス・アンドリツキ神父を取り上げてみたい。彼の闘いの中にはゾルブの人たちのナチスに対する闘いが凝縮しているように思われるからである。

2. ゾルブの殉教者アロイス・アンドリツキ神父¹⁷⁾

1941年に何人ものカトリック神父が逮捕され、ダハオ強制収容所に送られたが、その中の一人にゾルブ人のアロイス・アンドリツキ神父がいた。アンドリツキ神父はゾルブ人としての存立とカトリック信仰のためにヒトラー・ファシズムに対して徹底して闘った。ここで彼の生い立ちと短い生涯を見てみたい。

アロイス・アンドリツキは1914年7月2日にラディボールでマグダレーナとヨーハン・アンドリツキの三男として誕生した。アンドリツキ一家には、2人の娘と4人の息子の6人の子供がいた。4人の息子全員が神学を学んだ。ヨーハン、ゲラルドとアロイスは神父になった。末子のアルフォンスはゲラルドと同様イエズス会に入ったが、神学生のとき第二次世界大戦に出征し、戦死した。

両親は子供たちに深い宗教教育をした。父親と共に子供たちは毎月徒歩でゾルブ・ラオジッツの巡礼地ローゼンタールへ巡礼した。

アロイス・アンドリツキはラディボールで1920年から1924年の4年間国民学校に通い、引き続き1924年から1934年までの10年間バオツェンのカトリックのギムナジウムに通った。彼は1934年にそこを優秀な成績で卒業した。ギムナジウム在学中彼はゾルブ・ギムナジウム連盟のメンバーとなり、2年間は委員長であった。

ギムナジウム修了後、1934年から1938年まで彼はパーダーボルン・カトリック神学大学で哲学と神学を学んだ。ここに在学中彼はゾルブ学生誌

[Serbski student (ゾルブ学生)]の編集者となり、さらに「ゾルブ学生同盟」のスポークスマンになった。彼はすでにナチが政権を取る1933年以前に「ゾルブ学生同盟」の集会でファシズムに不断の注意を払うように警告していた。パーダーボルンでの勉学に引き続いて彼は1938年から1939年の1年間バオツェン近郊のシュモホティツにあるマイセン司教区立神学院で学び、最後の学業を終えた。

ペトルス・レゲ司教はアロイス・アンドリツキを1939年7月30日にバオツェン大聖堂で司祭に叙階した。次の日曜日、1939年8月6日に彼はラディボールの教区教会で初ミサを挙げた。1939年10月1日アンドリツキ神父はドレースデンで司祭としての活動を始めた。司教はこの有能な若い司祭をドレースデンの司教座教会ホーフ・キルヘ(宮廷教会)の助任司祭に任命した。そこでアンドリツキ神父は教区全体の青少年の世話をするかたわら、ドレースデン少年聖歌隊の舎監やコルピング家(一門)¹⁸⁾の指導司祭として働いた。とりわけ彼は、カトリックの青少年が信仰を守れるように、彼らのことを気にかけて。彼は学生のと看ゾルブの若者たちのために力を尽くしていたが、今度はドイツの若者たちのために同様の熱意を持って献身的に働いた。

すでに1936年1月16日にラディボールで開かれた「ドモヴィナ」の代議員会に神学生であった若きアンドリツキは出席し、熱烈な言葉で全出席者に対して、ナチス政権の抑圧政策を断罪し、断固たる不屈の精神でゾルブ民族の諸権利を護るよう要請していた。¹⁹⁾ 彼はまた若いゾルブ知識人の間に1937年の「ドモヴィナ」禁止後、ヒトラー・ファシズムに対する抵抗運動を組織した。

カトリック神父として彼はナチスの人種政策に反対した。彼は政治的展開に対して注意を喚起し、批判的に目覚めさせようと若者たちに強く働きかけたが、これがナチの青年組織「ヒトラー・ユーゲント」の指導者たちにとって疑わしくかつ危険なものと思われた。そしてアロイス・アンドリツキ神父はナチスに対しての批判およびドレースデンのカトリック青年たちに反ファシズム活動をしたという理由で、ゲスターポによって1941年

1月21日に逮捕された。こうして彼のドレースデンでの活動もわずか2年で終わった。この後彼はもはや自由になることはなく、1941年2月7日にドレースデンのゲオルク・ペーア通りにある未決勾留施設IIに5ヶ月間拘留された。ドレースデン地裁の特別法廷検事部は1941年7月15日に「国家と党に対する陰謀罪（いわゆる国家反逆罪）の廉で告訴した。シューリヒト担当検事の起訴状には次のように書かれている。「本官は、1940年9月から1941年1月の期間にドレースデンおよびピルナにおいて絶え間なく... 国家およびナチ党の指導者たち、彼らの指示、彼らによって設立された施設に関する敵意に満ち、扇動的な、悪意のある発言をした件で、アンドリツキを告発する... 被告人は帝国指導者ローゼンベルクおよびその著作に反対するのみならず、また様々な機会にナチ国家指導部の指示と施設ならびに広汎な努力と成果に極めて広く反対している。被告人の意見は、国民の政治指導部へ寄せる信頼を揺るがすことに適うものである...。」公判は公開されずに行われた。同様のナチ迫害者の裁判で勇気を持って弁護を買って出ているドレースデンのカストナー弁護士が弁護をした。召喚された証人によると、「アロイスは彼（担当検事：筆者注）の発言を否定もせず、取り消しもしなかったが、“扇動的な”策謀の非難には精力的に異議を唱えた。そのほかに彼は聖職者として、ヒトラー政権の教会敵視を明らかにする義務があると感じていた」という。²⁰⁾

アンドリツキ神父は扇動者などではない。彼は人間の尊厳と当時踏みにじられていた信仰を弁護したのである。彼はファシストの特別法廷においても毅然として反ヒトラー・ファシズムの態度を堅持したと言われる。弁護士の努力もあってアンドリツキ神父は比較的軽い6ヶ月の禁固刑を受けた。未決勾留の5ヶ月を差し引いて服役は1ヶ月であった。司教座教会主任司祭バイアー神父は釈放の指定時間に車で彼を待ったが、すでに約束の場所にはゲスターポのよく知られた黒塗りのリムジンが止まっていた。ゲスターポの係員が「これに乗れ」と命令した。彼はドレースデン警察本部の刑務所へ入れられた。こうしてアンドリツキ神父この世界から切り離された。

このように1941年8月15日に釈放後彼は直ちに再逮捕され、同年10月10日にダハオ強制収容所に移送された。ドレースデン教区カトリック青年団のある若者がドレースデン中央駅で、アロイス・アンドリツキ神父が列車でダハオへ連れ去られるのを目撃していた。ダハオ強制収容所はその存続の全期間を通じて主として政治犯を収容していた。²¹⁾ここで彼は囚人番号27829として扱われた。移送中に彼はトリアー出身のベネディクト会司祭マオルス・ミュンヒ博士と知り合いになった。マオルス・ミュンヒ神父はこう語っている。「ダハオへ移送中私たちはニュルンベルクを過ぎた頃12人の神父と一緒にになった。ほとんどはヴェストファーレンやポーランドからの比較的年齢の高い人たちであった。窓際にわれらがベンヤミン²²⁾が座っていた。“アロイス・アンドリツキ、ドレースデン・ホーフキルへの助任司祭です。”と彼は名乗った。警察での拘禁の月日の厳しさが彼からは読み取れた。痩せこけて、目がくぼみ、長い黒髪、青白い顔色、首に色物のマフラーを巻き、彼は最初の瞬間には少し尊大ぶっているように見えた。けれども半時間も経つと私は、ここで全く上等で、レベルの高い人間に向き合っていることが分かった。移送の終わり頃彼は友情を求めた。私たちは手を取り合い、これからの1年3ヶ月共に道を歩んだ。」²³⁾これは1941年10月から1943年1月の時期であった。

強制収容所での最初の日々に2人は、決して嘆かないこと、学問を修めた人間として名誉を決して踏みにじらないこと、一瞬たりとも神父としての務めを忘れないことを誓った。2人は強制収容所で共に豊かなときを過ごした。他の神父たちと彼らは研究会を作り、そこで週に3晩聖書が読まれた。この聖書サークルから典礼サークルができた。

1942年と1943年に食糧不足でチフスが流行したが、とくに1942年は最悪の年であった。5月末に大量死が始まった。週毎、月毎に死者が増えていった。7月と8月には平均して毎日一人の聖職者が死んだ。8月15日にドレースデンの同僚助任司祭ベルンハルト・ヴェンシュ博士が赤痢で、その14日後にロイターズドルフの主任司祭

アロイス・ショルツェ神父が腸チフスで死んだ。ダハオ強制収容所に収容されているマイセン司教区の11人の聖職者のうちこれですでに2人が死亡した。

1942年のクリスマスの後にアロイス・アンドリツキもチフスに罹った。しかし1943年1月19日ようやく彼は病舎に入ることを申告した。死の床にあるとき、彼は終油の秘蹟を乞うた。しかし彼の願いは拒絶された。看守は「キリストを彼は望み、注射を彼は受けるのだ」とのみ答えた。アロイス・アンドリツキ神父から2つベットが離れたところでチフスで寝ていたウィーンのヨハン・マリア・レンツ神父はその著書「ダハオのキリスト」の中で、看護人ヴァストルが病気の神父に死に至らず危険な注射を打った、と証言している。²⁴⁾朝の4時に彼の死の喘ぎが始まった。レンツ神父は這って行き、なお急いで彼に赦祷を与えたが、その時アンドリツキ神父は死んでいた。このように1943年2月3日にアロイス・アンドリツキは毒薬を注射されて殺害された。

囚人仲間のヘルマン・シャイパース神父はレンツ神父の証言にとくに付け加えて、アンドリツキは親衛隊のいかなる指令もなしにコミュニストの教会反対者によって直接殺害された、と述べている。そして「この状況はアロイス・アンドリツキが明白に殉教者であることを示している」²⁵⁾という。シャイパース神父はさらに、彼の同囚の1人がベルンハルト・ヴェンシュとアロイス・アンドリツキについて「私は、彼らが聖人であったと信じている」と述べたと伝えている。²⁶⁾ラディボール生まれのこの勇敢な闘士は非人間的な艱難と闘ったが、29歳と7ヶ月の若さでこの世を去った。1943年4月15日にドレースデンのフリードリヒ通りにあるカトリック墓地で骨壺の埋葬が行われた。数多くの聖職者と信徒たちがこの葬儀に参列した。

彼の生まれ故郷ラディボールの墓地にはゾルブ学生連盟によるゾルブ語の石の記念版が掲げられている。そこにはこう書かれている。

助任司祭アロイス・アンドリツキの
 栄誉をたたえて

1914年7月2日 1943年2月3日

ラディボールに誕生 　　ダハオで死去
 至高なる神の司祭
 人間であるために闘った人
 ゾルブ民族の殉教者
 若者の導き手
 ゾルブ学生連盟
 1946年復活祭に

短い生涯ではあったが、ここに彼の一生が凝縮して記されている。

「アロイス・アンドリツキは、祭壇の榮譽に高められる最初のゾルブ人になる望みを持っている。彼の殉教と彼の人格はこのことによってゾルブ民族とドイツ民族の和解に寄与することができるであろう。」²⁷⁾ドレースデン・マイセン司教区のヨアヒム・ライネルト司教は1998年7月2日ローゼンタールでの巡礼ミサのときにアロイス・アンドリツキ列福のための手続きを開示した。カトリック・ゾルブの人たちは目下彼らのために闘って倒れたナチズムの犠牲者アロイス・アンドリツキ神父を「ゾルブの殉教者」としてその列



アロイス・アンドリツキ神父の肖像



アロイ・スアンドリツキ神父の記念版

福運動を行っている。²⁸⁾

3. カトリック・ゾルブの地域²⁹⁾

16世紀のルターによる宗教改革の結果、その影響はゾルブ人地域にも及び、ゾルブ人の90パーセントがプロテスタントになった。カトリック地域は南東のパオツェン、西のカーメンツ、北のヴィティヘナオに囲まれた地域内の5つの教区に減少した。ヴィティヘナオは宗教改革のさい一度プロテスタントになったのだが、マリーエンシュテルン（マリアの星）修道院³⁰⁾の影響を受けた結果ふたたびカトリックに戻った。1635年にラオジッツの大半はプロテスタントのザクセンに割譲されたが、ハプスブルク家のフェルディナント2世はその際カトリック共同体を保護する権利を保持した。1815年に大半のプロテスタント教区とカトリックの1教区ヴィティヘナオはプロイセン領となり、その結果これらの教区はプロイセン政治のドイツ化の圧力強く受けることとなった。カトリック地域は無傷のまま残った。そして元来の5教区は9つの教区に再編成された。つまりラディボール、スディーア、ヴィティヘナオ、カーメンツ、ネーベルシュツ、クロストヴィツ、ラルピツ、オストロ、シュトルヒヤの9教区である。さらにパオツェンおよびその周辺を含んで、「ゾルブの教会」と呼ばれている聖母教会を教区教会とするカトリック共同体があった。

今日でも上ラオジッツ地方のパオツェン、クロストヴィツ、オストロ、ネーベルシュツ、ラディボール、ラルピツ、スディーア、シュトルヒヤおよびパンシュヴィツ - クーカオの各教区では住民の大部分がスラブ系少数民族ゾルブである。ゾルブ人の数は全体で6万人であるが、そのうちカトリック・ゾルブの数はおよそ1万5千人とされている。この人たちはパオツェン、カーメンツ、ヴィティヘナオに囲まれた三角地帯の中に住んでいる。ここがいわゆるカトリック・ゾルブ地域である。この三角地帯の外側はプロテスタント地域であり、従ってカトリック・ゾルブ地域はその周囲をプロテスタント地域に囲まれた、いわば閉ざされた地帯である。その中でカトリック・ゾルブはそのカトリック信仰と密接に結びついた非常に

多くの習慣を今日でもなお生き生きと保持している。彼らはゾルブ語でミサを行っている。

そこで次に中でもカトリック・ゾルブ色の強いラディボール、ラルピツ - ローゼンタール、クロストヴィツと「聖マリーエンシュテルン修道院」のあるパンシュヴィツ - クーカオを取り上げてみたい。

(1) ラディボール

ラディボールは住民数がおおよそ800人で、ゾルブ語を話す住民とドイツ語を話す住民のいる村落である。上ラオジッツの中心都市パオツェンの北約10キロに位置している。村には教会が3つあり、カトリック信仰共同体の精神的中心の役割を果たしている。教区教会は「マリア バラの冠の女王」教会である。ラディボールは同時に21の集落からなる行政区の中心地であり、行政区全体ではおよそ2000人のゾルブ人とドイツ人の住民が住んでいる。

ラディボール行政区の住民の70パーセントはゾルブ人で、その内の90パーセントはカトリックである。隣接の村落（行政区）でも似たような状況である。これらを取り囲んでいる地域はプロテスタント地域である。ラディボールの周辺地域は自然の豊かな農村地帯であり、北には自然保護区があり、原野や沼池がある。工業は存在していない。しかしドイツ統一後に多くの中小（手工業）企業が設立され、地区の在り様にも少しずつ変化の兆しが見られる。

ラディボールには2つの幼稚園、小学校と中学校がそれぞれ1校ある。小・中学校では生徒全員（ドイツ人子弟を含めて）がゾルブ語を学習している。家庭でゾルブ語を話している生徒（ゾルブ人子弟）は、学校ではゾルブ語を第1母語として学習し、多くの科目の授業をゾルブ語で受けている。

ヒトラー政権下の1937年にナチスはゾルブ語の根絶を狙ってゾルブ人教師全員を追放し、代わりにドイツ人教師を導入した。ゾルブ語が学校から消え、ドイツ語のみの単一言語となった。この時代にヒトラー・ファシズムと闘い命を落とした2人の人物がこの村から出ている。マリア・グロ

ルムス博士³¹⁾とアロイス・アンドリツキ神父である。³²⁾しかし兩人とも闘い半ばで逮捕され、それぞれ強制収容所へ送られ、そこで死んだ。ゾルブ語の授業はようやく戦後になってふたたび行われるようになった。

ラディボールでは一年を通してカトリック信仰と結びついた伝統的宗教行事が見られる。フォーゲル・ホホツァイト（鳥の結婚）、復活祭、ヘクセン・ブレネン（魔女焼き）、マイ・パオム（メイポール / 5月柱）、フロンライヒナム（聖体の祝日）、聖マルティンの日、聖ニコラオスの日などであるが、これらはラディボールでの人々の生活の一端を映し出している。多くの人々はこれらの行事を生き生きと保持するよう心がけている。

このようにここの人たちの生活はゾルブ語とカトリック信仰が根本的に結びついて成り立っているといえる。しかし今日ラディボールは閉ざされた地域ではなく、むしろ開かれた地域となっている。



ラディボール村の一隅

(2) ラルピツ - ローゼンタール

ラルピツ - ローゼンタールはゾルブ人の居住地で、住民数はおおよそ1900人であり、その90パーセントがゾルブ人である。この行政区は10の集落から成り、この地方の中心都市カーメンツから東に10キロの所に位置している。この一帯は上ラオジッツのゾルブ言語地域の中核地域である。教会は4つあり、ラルピツに教区教会「聖カタリナ」があり、ローゼンタールに巡礼教会

「われらが菩提樹の聖母マリア」がある。ローゼンタール地区のマリア教会は巡礼地である。ここにはマリアの泉があり、この水は眼病を癒す力があるとされている。毎年多くの巡礼者がこの巡礼教会を訪れている。マリア巡礼地ローゼンタールはカトリックゾルブの中心地である。

ところでローゼンタールには次のような言い伝えがある。³³⁾カール大帝が異教徒ザクセン族およびその同盟軍ゾルブ族と戦っていたとき、この地に兵營が置かれた。そこで人々はしばしば、1人の女性の姿をした人物が兵營の周りを歩いているのに気づいた。この女性の姿は、兵士たちが退去した後にも、さらに見られた。ある日のことゾルブの貴族ルツィアン・フォン・ツェルナがこの女性の姿を目撃し、馬に乗って現在のローゼンタール村の上手にある小さな丘のところまで後をつけたところ、その謎めいた女性は1本の菩提樹のところで姿を消したという。ルツィアンが目を上に向けたとき、彼は菩提樹の木のあいだに小さなマリアの像、すなわちローゼンタールの聖像を見た。彼はそこに木造の小聖堂を建立し、やがて信者たちが近くからも遠方からも訪れるようになった。ローゼンタールの最初の小聖堂の屋根の上にはたしかに1本の菩提樹がその枝を広げていた。

巡礼の始まりやマリア聖像の由来は歴史の闇の中にある。³⁴⁾15世紀にマリア像のあるこの小聖堂についての言及があり、聖像自体に対する芸術史的評価があって、15世紀中頃には巡礼地ローゼンタールが出来上がってきたらしい。それ以来ローゼンタールへの巡礼の目標は今日に至るまで、バラの冠を頭に被り、手に梨を持ち、幼子を抱いたマリアの小さな後期ゴシックの木像である。中世後期にはローゼンタールは多くの人々が訪れる場所となっていて、バロック時代にはこの巡礼地は最盛期を迎えた。

かつては北ボヘミアやシュレージエンからも巡礼者がやってきた。彼らはみなここで平安と救済を望み願った。今日でもこの地域をはるかに越えて数千人の巡礼者たちが毎年この小さな聖母マリア像を訪れている。とくに聖母マリアの祝祭日、復活祭の月曜日、聖霊降臨祭の月曜日、そして初聖体拝領などの特別な機会、またはラルピツ教

区の聖体祝別祭には教区のカトリック・ゾルブの人たちはほとんど全員が毎年、像と旗を掲げ、ローゼンタールの聖母のために歌いかつ祈りながら、かつてと同じように今もローゼンタールへ向けて巡礼の行進をしている。

ラルピッツ地区の教区教会「聖カタリナ」の前庭には墓地があり、白い質素な木の十字架の墓標が時代別順に並んで立っている。これは、死後すべての人間は平等であることを表しているという。この墓地のもつ特異性はヨーロッパで唯一のものであるといわれている。そこで死者たちは毎年復活祭騎者行列が伝えるキリスト復活の告知を聞き、来るべき終末での死からの蘇りを待っている、とされている。



ラルピッツ教区教会と墓地

(3) クロストヴィッツ

クロストヴィッツはかなり閉鎖的なゾルブ人居住地域の中心にあり、住民はおよそ1200人である。住民の90パーセントはゾルブ人でゾルブ語とドイツ語を話し、その多くがゾルブ語を第1母語としている。従ってゾルブ語は住民の日常生活において至る所で使われている。幼稚園や小・中学校でもゾルブ語は日常語や授業語として使用されている。

クロストヴィッツ行政区には6つの集落があり、この地方の中心都市カーメンツから東に約12キロの所に位置していて、東部でバオツェン郡に隣

接している。農村地帯で、景観は非常に素晴らしく魅力的である。農耕に適した地質のため農業は多くの収益をあげている。

ここでは道端の至る所に十字架、祈祷柱、ゾルブ語の標識があり、今日でもなおゾルブ語やゾルブ文化が、カトリック色の濃い上ラオジッツで、生きていることを示している。復活祭のミサに参加した後で、教区教会「聖シモンとユダ」から毎年「復活祭騎行」が隣接のパンシュヴィッツ・クーカオ教区に向かって出発する。祝祭の場合に多くの女性や少女たちはゾルブの伝統衣装をまとうが、普段の生活でもまだ着用している人たちが、とくに老人の中に若干見られる。これはゾルブの伝統的意識の表れに他ならないと言えよう。

ナチ時代の1937年12月12日にクロストヴィッツの学校の教室からすべての十字架が取り払われるという事件が起きた。校長が十字架のかかっていた場所にヒトラーの写真を掲げたのである。しかし女教師フレンツェルが担任の教室で12月13日に生徒の眼前で十字架をふたたび掛けた。他の教師たちも従った。校長は直ちにカーメンツの視学官にこのことを伝えた。視学官は即刻クロストヴィッツにやってきて、教師たちに十字架をふたたび取り外すよう命じた。それに対して住民から強い抗議が起きた。12月19日の日曜日のミサ終了後、隣接のホルカ村から来た7人の採石労働者たちがヒトラーの写真を取り去り、そこにふたたび十字架を掛けた。

生き生きとした宗教生活はゾルブの伝統である。教会、家庭、学校、共同体社会でのゾルブ語



ゾルブ人中学校

の日常的使用がここでは彼らの伝統を守り、アイデンティティを支えている。しかし近年この伝統あるカトリック・ゾルブの村も少子化の波に洗われ、子弟の数が減少し、中学校が財政的理由で廃校となった。中学生はラディボールへ転校を余儀なくされた。親たちは中学校再開のために上級官庁と目下交渉を重ねている。

(4) パンシュヴィッツ - クーカオ

聖マリーエンシュテルン修道院

パンシュヴィッツ・クーカオは上ラオジッツ地方のカトリック・ゾルブ地域にあり、パンシュヴィッツとクーカオが1957年に合併してできた行政区で、13の集落から成立している。住民はおよそ2300名で、その90パーセントはゾルブ人である。この地方の中心都市カーメンツから約13キロ離れた所に位置している。

ここにはシトー会の「聖マリーエンシュテルン修道院」があり、1248年に設立されて以来今日に至るまで750年以上も本来の役割を果たしている。ここに修道院が設立されたことについて次のような言い伝えがある。³⁵⁾カーメンツのベルンハルト3世が狩りで道に迷った。突然夜になって、公は馬ごと泥沼の中へ段々と沈んでいき、力の限りを尽くしたが這い上がる事が出来なかった。苦境の中で彼は神と聖母マリアに助けを乞い、命が救われたらこの場所に修道院を建てると誓った。長い夜の後で明けの明星の輝くなか白と黒のヴェールを頭に被った聖母マリアが天に現れた。彼の足下の地面が固くなった。彼は部下のところへ戻った。誓いを守り、彼はやがて当の場所に修道院を建て、それを「マリアの星」と名付けた。古文書によるとこの修道院はしばしば「明けの明星」と呼ばれている。ベルンハルトが沼地で沈んだ場所は、修道院の伝承によると、回廊にある十字架小聖堂によって正確に示されているという。

聖マリーエンシュテルン修道院は上ラオジッツ最大の荘園領主の1つであった。上ラオジッツのいくつかの村は聖マリーエンシュテルン修道院の創設に始まっている。13世紀の寄進状および贈与証書にはクーカオ、ナオスリツ、パンシュヴィッツ、プラオティツ、ラルピツ、ローゼンタール、

シュヴァインエルデン、ツェルナの地名が記載されている。数世紀にわたって土地と人々はこの修道院と密接に結びついていた。19世紀まで聖マリーエンシュテルン修道院長は約60の村々とヴィティヘナオ、ベルンシュタットの2つの都市を所有地として支配した。修道院内で裁判が行われ、人の生命に関わる「裁判高権」さえ聖マリーエンシュテルン修道院にはあった。

この肥沃な土地は良き収穫を確かなものとした。農業は修道院の存在を確かなものとした。シトー会の改革精神はこの地方の経済的發展を促進した。羊牧と養魚池は土地の開墾に寄与し、修道院はブドウ畑を作り、ホップ栽培を行った。手工業、学問、教育が刺激を受け、振興した。多くの修道院の村では豊かで、自覚した農民階層が発展した。「司教様の下では暮らし向きは良い」といわれた。事実課税負担は耐えられうるものであった。労働奉仕は世俗の荘園におけるよりも少なかった。19世紀になってようやく農民たちは荘園制度の軛から自由となったが、農民たちは修道院とさらに密接に結びついたままであった。ゾルブ語と文化はここではほとんど抑圧されなかったもので、ここではそれらは特別に生き生きと残ったのである。

毎年復活祭の時期には数千人の訪問客が、修道



聖マリーエンシュテルン修道院

院の周囲を回る復活祭騎馬行列を見物しにパンシュヴィッツ・クーカオにやって来る。村の至る所、道沿いの至る所に十字架や祈禱柱があり、上ラオジッツのゾルブの人たちがいかにカトリック信仰に深く根ざしているかを示している。

4. カトリック・ゾルブの伝統的宗教行事

(1) 復活祭騎行 (Osterreiten)⁶⁾

復活祭はカトリック教徒にとって最大の祭りである。この日に信徒はキリストの蘇りを祝う。上ゾルブ地方のカトリック・ゾルブの村々では独特な仕方での教会の祝日を祝っている。すでに数世紀以前から復活祭騎者が近隣の教区にキリストの復活を報せるという伝統があった。15世紀末にはすでにホイアスヴェルダとヴィティヘナオの間でこのような騎馬行列のあったことが知られている。この宗教行事の根は多分キリスト教以前の時代にまで遡ることであろう。当時人々は、野山を馬で乗り回すことによって若い種子を悪の妬みから護ることができる、と信じていた。キリスト教化後もこの風習は維持され、おそらくキリスト教の影響を受けて、これが今日公にキリスト教の信仰告白を表す、キリスト教の騎馬行列へ変わったのであろう。昔は、馬上で復活祭を過ごすのは農民か、その子息、または下男のみであったが、近年カトリックの参加者の構成はすべての職業に広がっている。馬、馬鞍、祭服などこの行事に参加するためには著しい財政的負担と犠牲が要求されるにもかかわらず、参加者の数は絶えず拡大してきた。約1500名の復活祭騎者が数えられる。参加者は仕事のない日はこの最大の祭りの準備のために費やされる。今日カトリック・ゾルブ地域だけでは祭りのための馬の確保は不十分であり、それ故この日のために多くの馬が、時には遠方からも、調達される。このように多くの努力と犠牲を払ってのみこの古い宗教行事はさらに継承されるのである。こうして毎年カトリック・ラオジッツでは復活祭の日曜日には9つの復活祭騎行が途につくのである。

同時にエキクメニカルな協働も復活祭騎行では育っている。プロテスタント教徒が馬の調達のさいにカトリック教徒を助けている。以前では考え

られなかったことだが、今日ではお互いの協力が可能となっている。ここかしこでプロテスタント教徒もまた復活祭騎馬行列に加わっている。そしてキリストの復活を告知している。これは長年に亘って分断されてきたプロテスタントとカトリックの障壁を乗り越え、相互理解とさらなる協働へと進む一里塚としてエキクメニカルな意義を持つものである。

復活祭騎行は、復活祭の日曜日に男たちが馬に乗って行列をくみ近隣の教区にキリストの復活を告げて回る、宗教行事である。毎年およそ1500名の男たちが名誉をかけ義務心からこの伝統的宗教行事を完遂する。途上の村々では復活祭の歌がうたわれ、村から村への道で復活祭騎者たちは口ザリオの祈りとさらに他の祈りを唱える。復活祭騎者たちはゾルブ語で歌いそして祈る。

ヴィティヘナオだけはゾルブ人とドイツ人ほぼ同数の復活祭騎者が行列に参加している。同地域に住むドイツ人も同じカトリックとしてこの祭事を支えている。以前はヴィティヘナオでもゾルブ人のみであった。目的地に着くと復活祭騎者たちは教会のまわりを回り、とりわけ死者たちにキリストの復活を告げるために、墓地の周りを回る。彼らはそれぞれの教区で司祭の挨拶を受ける。村の家庭で一服した後で騎者たちは鐘の音を合図に見送られて帰途につく。



復活祭騎者行列

(2) ローゼンタール巡礼行 (Wallfahrt nach Rosenthal)⁷⁾

巡礼は、特別な崇拜がもたらされる場所に寄せ

る信仰する者たちの集合体である。巡礼地ローゼンタールでは聖母マリア訪問の祝日(7月2日)と聖母マリア誕生の祝日(9月8日)の聖母マリアの祝祭日および聖霊降臨祭の日に全く独特な方法での巡礼が行われる。ゾルブの聖体行列はクロストヴィッツとラディポール、オストロ、シュトルヒャ、ネーベルシュツそしてマリーエンシュテルン修道院、近くのラルピツと遠くのヴィティヘナオそしてバオツェンからそれぞれローゼンタールへと向かう巡礼の道で出会う。各教区のマリア像が、季節の花で飾られ、行列の先頭に掲げられる。到着した巡礼者の歌声が教会の大きな鐘の音の響きに幾重にも重なり合い共鳴する。教会の内部ではミサのとき信徒の歌う聖歌は大音響へと膨らむ。

なかでもとくにヴィティヘナオからの巡礼は長い、歴史的な伝統がある。市の紋章が聖母マリア像であるヴィティヘナオとその周辺の村々はつねにローゼンタールの聖母の崇拜者であった。

巡礼は昔と同様に今日でも本来的には2つの道から成り立っている。すなわち外面的世俗的道と内面的精神的道である。世俗的道は、教区の巡礼行列が出発する早朝から、午前中いっぱい続き、正午に人々が家に戻って終わる。悪天候のときも変わりなく行われる。たとえば、「1891年3月31日の復活祭火曜日に大雪が降った。大雪をもともせず、8名の男性と2名の女性からなる行列が聖マリーエンシュテルン修道院からローゼンタールへ向かった。」³⁸⁾と記録には報告されている。別の年には太陽が燃えるような暑さで照りつけ、あるいは突風や驟雨が互いに張り合ったりすることもある。そのようなときにも人々は歩み続ける。外面的道を人々は教区の信者たちとともに歩み、内面的道を一人一人がそれぞれ自分自身のために歩む。

ローゼンタールで共に出会うことはずっと昔から多くのゾルブの人たちにとって自らのアイデンティティを体験することであった。ラオジッツでも、繰り返し非常に多くの人たちがその信仰と母語によって心が通じ合う場所は、おそらく他にはないであろう。その意味でローゼンタールはカトリック・ゾルブの精神的・文化的中心地である。

しかしローゼンタールへ巡礼するのは周辺のカトリック・ゾルブ教区の信徒のみではない。すでに昔からラオバン周辺地域あるいは北ボヘミアから巡者のグループがやって来ていた。ゾルブ人ではないが、シルギスヴァルデからの巡礼団はかなり大きな巡礼団で、徒歩でヴィルテン、ドレチェン、ゲーダ、クロストヴィッツを経て約30キロ離れたローゼンタールへ向かった。夕方に巡礼教会で礼拝が行われた。宿泊所は現地の納屋であった。翌朝のミサの後で巡礼者たちは同じ道で帰途についた。1990年以降シルギスヴァルデからの巡礼は違った方法で行われている。

巡礼のさいにはゾルブ語による聖歌を歌うことが求められている。今日最も有名なゾルブ語の巡礼歌は「ローゼンタールの聖母への賛歌」であるが、これには前史がある。ナチスの時代になるとゾルブ語が迫害され、1937年には公共でのその使用が禁止された。聖母マリアの祭日にローゼンタールへ巡礼する伝統行事もまた権力者の意志によって公道を歩くことが禁止された。ナチスは巡礼行を見たくなかった。それで巡礼は裏道や脇道を通った。これが幸いした。ヴィティヘナオのヤーコブ・クラール神父が秘密裏に聖母マリアの歌をチラシに印刷させ、1940年9月8日の聖母マリアの誕生の祝日にヴィティヘナオの巡礼団一行は、ローゼンタールを通過して教会へ進むとき、この歌を歌った。警察は監視はしたが、全行程を完全に取り締まることはできず、ゾルブ語の歌を禁止することができなかった。それ以来この歌はカトリック・ゾルブの全教区で共通の賛歌となり、祝祭歌となった。こうしてゾルブ語の継承に一役かったのである。

Mači Boža, Róžeňčanska,

(ローゼンタールの聖母さま)

pěstoň svoje džěči, nas!

(あなたの子供たちを見守ってください!)

Z twojim Synom,

(あなたの息子、

našim Bohom,

私たちの神とともに)

škitujtaj nas kóždy čas!

(いつも私たちをお守りください！)

巡礼はその本質から本来的に境界を設けず、様々な言語や文化を越えているものである。引き継がれてきた巡礼の伝統はそれだけに今日でもすべての人々への挑戦であり、精神の力が多様性と寛容とを通して実現されうるように、すべての人々を招き入れることである。言語の相違にもかかわらず行為と行動によって他の人びとも互いに理解しようというのが巡礼の本質である。



巡礼教会ローゼンタール



ローゼンタール巡礼行

(3) 聖体の祝日 (Fronleichnam)³⁹⁾

「聖体の祝日」は全カトリック教会において重要な祝日であり、1264年8月11日の教皇ウルバヌス4世の公布に遡る。教皇ウルバヌス4世は、「キリストのからだの祝日」(vronlichname 中高

ドイツ語⁴⁰⁾を定め、聖体を讃えて敬うために、特別な祭りが祝われるべきであると命じた。かくして教会の普遍的な祝日となった。カトリック・ゾルブにとってもこの教会の大祝祭日は大きな意味を持っている。

1264年に最初の「聖体の祝日」がローマ、ミュンスター、オルヴィエトで行われた。1273年にはベネディクトボイロン、1274年にはケルン、1276年にはオスナーブリュクで行われた。「聖体の祝日」は、1279年のケルンで行われた行列によってその特別な性格をすでに持つようになった。まさに「聖体の祝日」の行列は生きているキリスト教を具象化する。聖別されたホスチアの形姿をとってキリスト自身が都市や、野や森を通って行く。現に存在する神が目に見えるものとなる。神は聖堂を去り、世俗を回る。

しかし宗教改革のときに「聖体の祝日」はカトリックとプロテスタントの宗派を分かち徴となった。ルターは1527年に「聖体の祝日」を「最も有害な祝日」と呼んだ。ルターにとっては聖書による根拠が欠けていると思われた。行列は彼には神の冒瀆に値するものであった。従ってプロテスタント教会では「聖体が〔実体変化〕するという教義」を退かせたために、この「聖体の祝日」を祝うことはない。⁴¹⁾

トリエントの公会議は「聖体の祝日」を確認した。多くの人びとを動員し、経費をかけてカトリック教徒はこの祝日に彼らの信仰を示した。副助祭、助祭、司祭、修道女、修道士、ミサの侍者たちが旗や小鐘や香をもって土地の名士や初聖体拝領者、男性や女性のグループをとめない、諸連合、諸信心会、諸団体を階層毎に順序よく従え、行列を組んで町や野を通り抜けて行った。祈りそして歌いながら彼らは厳かに装飾されたいくつもの通りを通してホスチアに付き従った。行列は厳かなミサで終わった。今日でもドイツの各地で街を歩く華やかな聖体行列が見られる。さらに「聖体の祝日」の行列は徒歩でのみ行われるばかりではない。キーム・ゼー(湖)、ムルナオ近郊のシュタフェル・ゼーおよびケルンでは船による行列が行われている。

カトリック・ゾルブ地域での「聖体の祝日」の

行列はとりわけその独特な民族的要素を示している。(聖体)行列には聖別されたホスチアが携行される。これはもともと祭りとはなんの関わりもなかったが、14世紀に急速に広がったと言われる。さらにこの聖体行列が民族の独自性を示しているのは、多くの女子学童が教会の祝日や結婚式あるいは洗礼のとき身に付ける色鮮やかな立派な祝祭服を着用して、行列に参加することである。手間のかかる民族服の着付けはその都度ゆうに1時間は越え、熟練した着付師のみだけができるといわれている。女性たちは教会の礼拝にいくときの民族衣装を身に纏い、今では少なくなったが、強く糊付けした白布を頭に被る。

「聖体の祝日」の行列は「聖体の祝日」の日 - 聖霊降臨祭の10日後 - と直後の日曜日に行われる。教会と野外に設けられた祭壇は花と白樺で飾られ、行列が歩む道は草が撒かれ、白樺の若木で縁取られる。多くの家々や教会の塔にはゾルブの旗が掲げられている。行列が進むあいだ、少女たちは路上に敷かれた草の上に花びらをまき散らす。

ラルピッツ教区の「聖体の祝日」の行列にはほとんどすべての教区民が参加する。聖体行列は教区教会から出発し村を通り抜けて行く。村々を通っていく長い行列は祝典の特色を醸し出し、若い少女たちの華やかな民族衣装は「聖体の祝日」のミサに彩りを添える。多数集まった教区民はゾルブ語を話し、彼らがゾルブ語の聖歌を歌うときには、トロンボーンの合奏団が伴奏する。このようにして宗教行事に重ねて民族の伝承が守られ、ゾルブ語もまた保持されている。「聖体の祝日」の



聖体祝日の行列

行列はローゼンタールへ向かう巡礼行となる。

ラディボール教区でも他のカトリック教区と同様に教区民は、とりわけ多くの少女たちは特別に美しい民族衣装に身を固め、司祭が掲げる聖体とともに教区教会を出て、村の中央広場を通り、短い祈禱が行われる祭壇へと向かう。ここでもゾルブ語が使われる。聖体行列は木曜日の午前と午後および直後の日曜日に行われる。

5. 巡礼教会ローゼンタール⁴²⁾

カトリック・ゾルブの中心地

巡礼地ローゼンタールはラルピッツ - ローゼンタール行政区のローゼンタール村に属し、シトー会「聖マリーエンシュテルン修道院」から北に6キロのところに位置し、バオツェン、カーメンツ、ヴィティヘナオに囲まれた三角地帯、すなわち上ラオジッツ地方のカトリック・ゾルブ地域にある。ローゼンタール村の住民数は約300人であり、その内の90パーセントがゾルブ人である。

巡礼地ローゼンタールは宗教改革以前から存在するドレースデン - マイセン司教区唯一の巡礼地で、この教会には神の母「われらが菩提樹のマリア」の聖像があり、崇拜の対象となっている。教会の西側には広い草原があり、ここで、教会内に入りきれない巡礼者がいる場合には、祭壇が置かれ「巡礼広場」となる。

ローゼンタールの巡礼教会はこの地方の風景のなかで変わることのないランドマークである。教会の反った庇のある高い塔が広く開かれた農耕地に向かって立っている。田舎の景色の中で驚くほど大きな姿を見せている教会は、訪ねてくる人たちにまず、教会内部の設備に対する期待の高まりをきっと起こさせてくれるであろう。しかしその内部設備はむしろ控え目である。他の有名な巡礼地とは違って、ここでは教会内部はシンプルで、すべては本来の中心点である中央祭壇に向かって整えられている。内陣の柱の抑えた色調がさらにその印象を補っている。祭壇上部の両脇には、2人の有名な聖人、聖ベネディクト⁴³⁾と聖ベルナルド⁴⁴⁾が立っている。これはこの祭壇が「聖マリーエンシュテルン修道院」およびシトー会教団と密接な関係を強調していることを表している。

45) 祭壇上部の飾りの黄金色に輝く光輪の真ん中にほとんど気付かれずに、ローゼンタールの聖母の小さな聖像が置かれている。しかしまさにこの小さな木像の存在こそが「われらが菩提樹の聖母」への伝統的な巡礼の中心点なのである。ここを訪れる多くの者たちにとってマリア崇拜の伝統はこの像に基づいている。直接的に、いわば面と面を向き合って、この聖像が宗教的崇拜の対象となっている。

ところでマリア崇拜はほとんどキリスト教信仰そのものと同じくらい古い。すでに西暦431年にはエフェソの教会一致公会議でマリアは「神の母」として宣言され、特別に強調された。典礼と同様に教会芸術においてもマリアのモチーフは数世紀を通じて変遷したが、女王としてのマリアあるいは地上の人間に親密さと庇護を与える女性であり母であるマリアという2種類のタイプが中でも支配的である。中世後期に、キリストが情け容赦のない裁判官として世の終わりに君臨し、誇り高い近寄りたがい支配者に一段と高められたとき、それに対して神の母は人間的特徴をさらに強く備えるようになった。このようなマリア像は人々の信心深さを表す対象としてすでに広く受け入れられていた。

聖母の姿が醸し出す詩的品性は純粋に人間的なものと高められた神的なもの、日常の世俗的なものと超自然的な天上的なもののあいだの無比の結合である。言い伝えられている最も古いマリアの祈りは仲介者で調停者としてのマリアに呼びかけてはいるが、マリア自身は崇拜されてはいない。神の母を崇拜するということでのマリアを信心する形は遅くとも14世紀以来は数多く知られている。カトリック教会が反宗教改革に着手したトリエントの公会議後、中世のマリア崇拜は新たに命を吹き返した。礼拝像や彫像は宗教的理想像となった。

ローゼンタールの神の母の聖像は、菩提樹の木材から彫られ彩色を施された高さ22センチの小さな立像である。花の冠を被ったマリアは左腕に幼子イエスを抱き、右手に梨を持っている。芸術史的には1460年から1480年の間につくられたらしいと記されているが、この聖像が芸術的に重要

な作品であるかどうかはほとんど問題ではない。むしろ、この作品は信仰心から作られているので、内面的な固有の思索の度合いを知らせていることがここでは重要なのである。各世代に亘って数多くの巡礼者たちはこの聖母マリアの肖像に親密さを求め、あるいはその神的なものへの精神的・情緒的結びつきを体験してきた。巡礼者たちは彼らの願いと祈りの中にその時々自らの全く個人的な願望と希望を包み込んできた。

1928年に巡礼地ローゼンタールは「神の母」を信仰する者たちが特別な崇敬を表す場所の1つに挙げられた。ローマからの通達によってローゼンタールの聖像は冠で飾られ、「われらが菩提樹の聖母」という名前を得た。聖像が冠を被る儀式は聖母マリア誕生の祝日の1928年9月8日にマイセン司教クリスティアン・シュライバー博士によって行われた。わざわざそのために祭壇が戸外に設けられた祝祭場には、周辺のカトリック・ゾルブの各教区からおよそ6000人の巡礼者たちが、さらにドイツの各地から信者たちが参集した。

ここにはマリアの泉があり、この巡礼教会を訪ねる非常に多くの巡礼者や訪問者たちはここを訪れたさい同時に石の階段を下りて新鮮で冷たくガラスのように透明な水の所へ行く。16世紀以来墓地の壁の下から勢いよく湧き出る2つの泉のことが知られており、人々はここで体の疾患や障害、あるいは心の苦悩があるとき癒しを求めてきた。マリアの泉には不思議な治癒力があり、多くの盲人の目に光を取り戻し、萎えた手を治し、他にも奇跡を行ったと伝えられている。1766年に釣り鐘状の頭巾の形をした八角形の小さな聖堂がこの泉の上に建てられた。

ドレーズデン・マイセン司教区の多くの信徒やドイツの遠隔地からの多数の訪問者にとって、街道沿いや村々の広場にある2カ国語による地名の表記や数多くの十字架と祈禱柱はいわば道標であると同時にこの地がカトリック・ゾルブのラオジッツであることを示している。ローゼンタールへの道はこのような風景の中を巡礼地ローゼンタールへ至るである。ゾルブの聖母マリアの恵みの場所ローゼンタールはこの地域に居住している人々の意識の中に深く根を下ろしている。

「とくにカトリック・ゾルブの人々にとってローゼンタールは未来においても故郷そのものであろう。」(ヨアヒム・ライネルト司教)⁴⁶⁾

「ローゼンタールにおいてゾルブ民族の最も強力な宗教的民族的泉が湧き出している。これがわれわれのローゼンタールの意義である。」(劇作家ヨーゼフ・ノーヴァク)⁴⁷⁾ このようにローゼンタールはまさしくカトリック・ゾルブの中心地なのである。



われらが菩提樹の聖母マリア像



聖母マリアの泉

おわりに

カトリック・ゾルブの人たちが居住しているザクセン州(国)は憲法第2条、第5条および6条において彼らの市民としての権利をドイツ人と全く同等に認め、保障している。⁴⁸⁾ 憲法で彼らの民族としてのアイデンティティを支える宗教、言語、

文化、伝承、学校制度を保障している意味は非常に大きい。EUもその憲章でEU諸国内の小少数民族を明確に支援している。⁴⁹⁾ さらにヴァチカンと自由国(州)ザクセンは協定を締結しているが、その第10条においてカトリック・ゾルブの保護を定めている。⁵⁰⁾ このように風は彼らに有利に吹いている。さらに戦後のドイツはナチの否定を国是としている。ナチ時代に彼らが味わった辛苦はそれだけ民族集団としての存立に制度的には反映しているといえよう。従ってこの風に向けていかに上手く帆を張れるかがゾルブ丸の緊急の課題である。

以上のような背景から彼らは自らの存立を掛けてさまざまに活動している。ゾルブ語による出版活動、テレビ・ラジオ・新聞等のメディア活動、教会での伝統行事の維持・保存活動、市民による文化・芸術活動、ゾルブ研究所でのゾルブに関する学術研究(ゾルブ学)活動、学校での子弟に対するゾルブ語の教育活動、外部世界(ドイツ国内および国外)へのメディアによる自己宣伝および啓蒙活動などがそれである。これらは同化現象に歯止めを掛けようとする一種の戦いである。これらの活動を担っているのは主として聖職者、学者、作家、芸術家、教師など意識的な知識人であり、これらの人々のひたむきな姿勢や献身的態度は賞賛されるべきである。しかし彼らの熱意だけでは、換言すればもはやイデオロギーや精神論だけでは当然ながら成り立ち行かないのも明白である。

ゾルブ文化やゾルブ語の維持にはそれらを支える経済的基盤が必要である。ところが彼らを取り巻く社会状況、つまり現在のドイツの経済的状況は極めて厳しい。支援する連邦、州、地方自治体の財政状態も決して楽ではない。しかしコンスタントな財政的裏付けが今後の活動の発展にとっては必要である。それ故ゾルブ人にとっては多数派であるドイツ人との関係の在りようが問われよう。つまり彼らを取り巻くドイツ人の共感と支持を得なければ財政支援は前に進まない現状がある。

彼らは歴史の中でドイツ人に逆わらないことを基本的態度として生きてきた。すなわち自らを抑え、命令には逆わず、黙って従うという生き方

が彼らの基本的な生活態度となった。こうして自己抑制の効いた、従順に振る舞うことのできる民が誕生したというのである。⁵¹⁾ またそうしてこそドイツ人の中で生きてこれたというのである。そしてその帰結として彼らのなかに大別すると消極的態度と積極的態度という相反する2つの生き方が出てきた。すなわち大勢には逆ならず、ともすれば次第に自己のゾルブ人としてのアイデンティティを失い、ドイツ人に飲み込まれ、順応し、ついには同化してしまうという生き方と、少数であるが故に絶えず危機意識を持ち、自己のゾルブ人としてのアイデンティティを声高に主張するといった生き方である。ゾルブの人たちがゾルブ人であるためには何れともあれ後者の行き方を取らなければならないのは至極当然であろう。

しかしゾルブ丸の人たちが独自の民族集団として、今後もドイツ人の大海に飲み込まれ沈没することなくその存立を維持していくためには、今まで以上にドイツ人との平和的な共存が必要であろう。そのためにはドイツ人の同感と理解がなければならない。そのためにゾルブ人教師たちのイニシアチブによって目下「2言語」運動が提唱されている。⁵²⁾ 「ラオジツツのもつありのままの豊かさ - それは2言語世界である」というのが、その主張である。この運動では幼稚園や小学校レベルでドイツ人児童に対して積極的に働きかけが行われている。同じ地域に隣人同士で生きているのだから、お互いに相手の文化や言語を知ろうというのである。このようなゾルブ側からの積極的な働きかけは、自らの閉鎖的な社会を脱してより開放的なドイツ人と共存する社会を目指しているだけに大いにその成果が期待される。文化や言語が異なる相手と協働するには、まず自ら率先して共通の理解に至る土台を築き、さらに共に生きる社会へと道を切り開いていくことが重要であろう。

そしてさらに大切なことは彼ら自身が民族としての自己意識を保ち続けることであろう。また彼らが個人としても意識的にゾルブ人として存在し続けていこうとする強い意志がおそらく現今の困難な状況を切り開いていくことになるだろう。ドイツ人との協調・共存を図りながらも同化は民族存続のために絶対に食い止めなければならないの

である。

「わたしたちの教区の多くのカトリック・ゾルブの家庭では今日でも依然としてゾルブ語が流暢に話されている。ここでは宗教生活がゾルブ語の積極的な推進の重要な支援となっている。第2ヴァチカン公会議後の典礼の改革はこの言語に肯定的な効果を及ぼした。それ以来ミサは母語で行われるようになり、ゾルブ語は公式な典礼言語となった。戦後の数年はゾルブの人々は自活を強いられ、民族生活および宗教生活の両面で多くの事柄のために戦うことを余儀なくされた。⁵³⁾ そうこうしているうちに教会からの援助が非常に増大した。ゾルブ・カトリック神父同盟は1975年に、平信徒もまた活発に働くゾルブ司牧同盟に拡大した。⁵⁴⁾ こうして信仰基盤は整えられたのである。

ゾルブ民族は歴史的に下ゾルブと上ゾルブ、プロテスタントとカトリック、プロイセンとザクセンという対立項を抱え込んでいるが、近年これらにさらに世代間の対立が加わっているという。これら対立項はゾルブ民族の存立にとって大きな軛となっているが、この難題を少しでも解決していかないとこの民族の行く末はより厳しいものとなるだろう。しかし少なくともカトリック・ゾルブ地域にはその歴史、文化、言語を守るための基盤、すなわち家庭や教会でのゾルブ語の使用、学校でのゾルブ語学習、カトリック・ゾルブの伝統的宗教行事などが整っていて、教会を中心としてそれらを守る活動が見られるので、そこで生きているカトリック・ゾルブの人々に同化を乗り越えて行く力を期待しても良いであろう。つまりゾルブ民族の未来が彼らに託されているといっても過言ではないのである。

註

- 1) Tomasz Kowalczyk: Die katholische Kirche und die Sorben 1919 - 1990, Bautzen 1999, S.31.
- 2) Martin Walde: Gestaltung sorbischer katholischer Lebenswelt. Eine Diskursanalyse der religiösen Zeitschrift Katolski Posol zwischen 1863 und 1939, Bautzen 2000, S.6. さらにここには「この関連で、上および下ラオジツツのプロテスタント・ゾルブ人に対して比較検討する見方もまた重要で有益である

- 3) 本章では、Martin Kasper: Geschichte der Sorben, Band 3, Von 1917 bis 1945, Bautzen 1976. のS.123-139 (2. Die faschistische Sorbenpolitik) を参考にした。
- 4) Peter Kunze: Durch die Jahrhunderte. Kurze Darstellung der sorbischen Geschichte, Bautzen 1980, S.165.
- 5) Dieter Grande, Daniel Fickenscher (Hrsg.): Eine Kirche Zwei Völker, Bautzen 2003, S.578.
- 6) Martin Walde: a.a.O., S.231-238参照。
- 7) Martin Kasper: a.a.O., S.186.
- 8) ゾルブ人神父としては、Alois Andritzki 神父の他に Johann Ziesche 神父と Benno Scholze 神父の計3名がダハオ強制収容所に入れられた。
- 9) Tomasz Kowalczyk: a.a.O., S.88.
- 10) Martin Kasper: a.a.O., S.155.
- 11) Joachim Bahlcke (Hrsg.): Geschichte der Oberlausitz. Herrschaft, Gesellschaft und Kultur vom Mittelalter bis zum Ende des 20. Jahrhunderts, Leipzig 2001, S.230.
- 12) Edmund Pech, Dietrich Scholze (Hrsg.): Zwischen Zwang und Beistand, Sonderausgabe, Dresden 2003, S.85. ここにはゾルブ問題に関する8つのテーゼが記載されている。
- 13) Joachim Bahlcke (Hrsg.): a.a.O., S.230.
- 14) Ebenda.
- 15) Martin Kasper: a.a.O., S.184.
- 16) Wolfgang Wippermann: Sind die Sorben in der NS-Zeit aus "rassischen" Gründen verfolgt worden?, in: Lëtopis 43, Bautzen 1996, S.32-33.
- 17) 本章では、1. Helmut Moll (Hrsg.): Zeugen für Christus. Das deutsche Martyrologium des 20. Jahrhunderts, Band I, Paderborn 2001, S.154-6, 2. Maria Kubasch: Alois Andritzki, Berlin 1974, 3. Tomasz Kowalczyk: Die katholische Kirche und die Sorben 1919 - 1990, Bautzen 1999, S.101-105. を主として参考にした。
- 18) Bistum Dresden-Meißen Archiv 2004: Festwochenende zum 150-jährigen Bestehen der Kolpingfamilien in Dresden vom 7. bis 9. Mai in Dresden. 参照。
- 19) Martin Kasper: a.a.O., S.166.
- 20) Maria Kubasch: Alois Andritzki, Berlin 1974, S.23-24.
- 21) Johannes Tuche (Hrsg.): Der vergessene Widerstand. Zu Realgeschichte und Wahrnehmung des Kampfes gegen die NS-Diktatur, Göttingen 2005, S.67-68.
- 22) Benjaminと呼んだのは移送中の一行が12名であったので、旧約聖書にあるヤコブの12人の息子の末子 Benjaminを引き合いに出したのだと思われる。従ってここでは一番の年少者の意味で使われている。
- 23) Maria Kubasch: a.a.O., S.25.
- 24) Helmut Moll (Hrsg.): a.a.O., S.155.
- 25) a.a.O., S.156.
- 26) a.a.O., S.160.
- 27) Tomasz Kowalczyk: a.a.O., S.105.
- 28) Bistum Dresden-Meißen Archiv 2004: Bischof übergibt Unterlagen zum Seligsprechungsverfahren für Alois Andritzki am 17. Dezember in Rom.
- 29) 本章を書くにあたっては、主に各地方自治体、各

教区および教会の小冊子、新聞・雑誌記事、現地での聞き書きに依った。

- 30) 1248年に設立されたシトー会の女子修道院。ブランデンブルク辺境泊がこの修道院に保護を与えた。本章の(4)のところでは触れるが、この修道院はスラブ諸民族に対する布教の役割を担っていて、いわばこの地方でのキリスト教宣教の砦の役割を果たしてきた。
- 31) マリア・グロルムス博士(1896 - 1944)は教師でジャーナリストであったが、1934年にナチスに対して抵抗運動をしたため逮捕され、ラーヴェンスブリュック強制収容所に送られ、そこで死亡した。ラディポール村にはマリア・グロルムス博士の住んでいた家が現存している。彼女の功績を讃えて、メイン通りの名称は「マリア・グロルムス博士通り」と言い、小学校および中学校は「マリア・グロルムス博士」の名前を付けている。小・中学校の前庭に博士の記念像が立っている。墓地には彼女と妹の墓がある。
- 32) アロイス・アンドリツキ神父については前章で述べたので、ここではラディポール村との関わりを記す。村は彼の功績を讃えて、幼稚園に「アロイス・アンドリツキ」の名を付し、彼の生家を村役場にして、その壁面に大きな銅板の「アロイス・アンドリツキ神父」記念版を填めている。なお彼の墓はドレーズデンのカトリック中央墓地にある。
- 33) Siegfried Seifert: Wallfahrtskirche Rosenthal, Deutsche Ausgabe, Regensburg 1999, S.3-4.
- 34) a.a.O., S.4-8.
- 35) Alfons Frenzel: Rosenthal, Bautzen 1998, S.87.
- 36) Hanka Fascyna: Sorbische Bräuche, 2. Auflage, Bautzen 1996, S.28-31.
- 37) Alfons Frenzel: a.a.O., S.46-51.
- 38) a.a.O., S.50.
- 39) Hanka Fascyna: a.a.O., S.40-43.
- 40) 新高ドイツ語で Fronleichnam. 中高ドイツ語ではもともと「主の体」を意味していたが、1246年以降は聖霊降臨祭後の第2木曜日、すなわち「聖体の祝日」を表すようになった。しかし木曜日ではなく、日本のように、日曜日に祝う地域もある。
- 41) 使徒パウロによる「コリント人への第1の手紙」にはこう書かれている。「あなたがたに伝えるのは、実に、わたしが主から受けた事なのです。すなわち、主イエスは死に渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてから手で分け、そして、こう言われました。[これはわたしの体、あなたがたのためのものである。わたしを思い出すために、このように行いなさい]。食事が終わってから、主は杯についても同じようにして言われました。[この杯は、わたしの血による新しい契約である。これを飲むときはいつでもわたしを思い出すために、このように行いなさい]。実に、あなたがたはこのパンを食べ、この杯を飲むときはいつでも、主がおいでになるまで、その死を告げ知らせるのです。](11章23 - 26節)これが聖書のなかで最も古い聖体制定につい

Die katholischen Sorben

Die letzte Festung des sorbischen Volkes gegen die Assimilation

Die Sorben, ein kleines slawisches Volk in Brandenburg und Sachsen, sind eine von vier anerkannten Minderheiten in Deutschland. Heute bekennen sich etwa 60 000 deutsche Staatsbürger zu ihren sorbischen Wurzeln. Davon leben 20 000 in der Niederlausitz im Südosten Brandenburgs und 40 000 in der Oberlausitz im Norden Sachsens. Die meisten Sorben sind evangelisch, ca. 15 000 sind katholisch.

Bereits in Preußen wirkte in sehr großer Germanisierungsdruck auf diese Volksgruppe. In Nazideutschland verstärkte sich dieser Druck. Hitler übernahm in Deutschland am 30. Januar die Macht. Bald danach begann auch in der Lausitz eine Verfaftungswelle. Die Anwendung der sorbischen Sprache wurde überall untersagt. In vielen Orten der Lausitz fanden rassenspolitische Untersuchungen statt. Die Nazis waren bemüht, zu beweisen, dass die Sorben deutscher Abstammung sind.

Der katholische Geistliche Alois Andritzki beteiligte sich aktiv am Widerstand. Wegen seines Engagements gegen Hitler wurde er von der Gestapo 1941 festgenommen und nach Dachau abtransportiert. Er wurde am 3. Februar 1943 im KZ Dachau ermordet.

In den Pfarrgemeinden Bautzen, Crostwitz, Ostro, Nebelschütz, Radibor, Ralbitz, Sdier, Storch und der Pfarrvikarie Panschwitz-Kuckau in der Oberlausitz gehört ein Großteil der Bewohner zu den Sorben. Sie sind fast alle katholisch. In diesem geschlossenen Siedlungsgebiet wohnen die katholischen Sorben, die zusammen mit ihrem Glauben sehr viele alte Bräuche lebendig erhalten haben.

Der lange Zug sorbischer Osterreiter, die auf kostbar geschmückten Pferden betend über die Felder reiten, oder eine Fronleichnamprozession, zu der jungen Mädchen in ihrer traditionellen volkstümlichen Festtracht mitgehen, beeindruckt alle Besucher, die das einmal miterleben. Sie feiern ihre Gottesdienste in sorbischer Sprache. In diesem Gebiet spricht man alltäglich sorbisch. In der Schule lernen auch die Kinder sorbisch als erste Muttersprache.

In der Lausitz bemerkt man aber heute, dass die Assimilation der Sorben mit ihrer Umgebung zunimmt. Sie ist überwiegend bei den evangelischen Sorben zu bemerken. Es gibt in der Lausitz ca. dreimal mehr evangelische Sorben als katholische. Diese Tendenz ist also sehr gefährlich für das Bestehen des sorbischen Volkes. Die Sorben sind aber bestrebt, diese Entwicklung aufzuhalten. Die Assimilierung setzt sich dennoch fort.

Wie soll man die Tendenz der Assimilation schwächen oder stoppen? Maßnahmen gegen eine Assimilierung könnte man sich bei den katholischen Sorben anschauen. setzen sich sehr aktiv für den Erhalt der Sprache und der Tradition ein. Als die letzte Festung gegen die Assimilation spielen sie wahrscheinlich eine wichtige Rolle.

キーワード ラオジッツ(Lausitz) カトリック・ゾルブ(die katholischen Sorben) 同化 (die Assimilation)

ての記録である。

- 42) 本章を書くにあたっては、Alfons Frenzel: 前掲書および Siegfried Seifert: 前掲書に多くを負っている。
- 43) ヨーロッパの修道院制度の創設者。ベネディクトは480年頃にヌルシア（現在のノルチア）に生まれた。ローマで勉強後500年に彼は世間との縁を絶ちきろうとしてスピアコに戻り、そこでまずは隠世修道士として生きた。後に彼はこの地から12の小さな修道院のような共同体を指導した。529年に修道院をモンテ・カシーノに創設した。この修道院はベネディクト隠世修道会の修道院生活揺籃の地と呼ばれ、これでもって数世紀にわたってヨーロッパを特色づけた。モンテ・カシーノで彼はその共同体のための聖務規則を完成した。これは後に彼にちなんで聖ベネディクトの会則と名付けられた。557年3月21日にモンテ・カシーノで死んだ。
- 44) シトー会創設期の最も著名な修道院長・教会博士。ペルナルド・フォン・クレルヴォは1090年にブルグンドで生まれた。1112年に彼はシトー会に入った。そして3年後にはすでに修道院長としてクレルヴォ修道院創設のために派遣された。彼の広汎な政治的教会政策的諸活動と並んで、彼はフランス、ドイツ、イタリアの各地をまわり、とりわけ説教と著作によって信仰の拡大と進化のために働いた。彼は絶えず神に強いられて、人々に平和と一致を説き、すべてを愛から行った。1153年8月20日にクレルヴォで死んだ。彼は教会博士になった。
- 45) Alfons Frenzel:a.a.O., S.33.
- 46) 前掲書の司教による前書き[Das kleine Dorf Rosenthal]から引用。
- 47) 前掲書の70頁から引用。
- 48) ザクセン州（国）憲法にはゾルブ民族に関連して以下のようなことが書かれている。

Artikel 2 (4) ゾルブ人の居住地では国旗の色および国の紋章と共にゾルブの旗色および紋章の導入が等しく許可される。

Artikel 5 (1) 自由国 (州) ザクセンの市民にはドイツ人、ゾルブ人、その他の民族に所属する者が属する。国 (州) は彼らの故郷への権利を認める。(2) 国 (州) はドイツ国籍をもつ少数民族がそのアイデンティティを保持しかつその言語、宗教、文化、伝承を保護する権利を認め保護する。(3) 国 (州) は適法にわが国に滞在する外国人少数者の利害を配慮する。

Artikel 6 (1) わが国 (州) に居住するゾルブ民族の市民は国民の平等な部分である。国 (州) はそのアイデンティティを保持しかつとくに学校、就学前児童施設および文化施設をとおして父祖伝来の言語、文化、伝承の発展を保護する権利を認め保護する。(2) 国 (州) および地方自治体の計画策定においてはゾルブ民族の生活必需が考慮されるべきである。ゾルブ民族集団の居住地域のもつドイツ - ゾルブ的特色は保持されるべきである。(3) とくに上ラオジッツおよび下ラオジッツ地域に住むゾルブ人の国 (州) への決定的な協力は国 (州) の関心事

である。

- 49) Ludwig Elle:Die Europäische Charta der Regional-oder Minderheitensprachen und die Sprachenpolitik in der Lausitz, Bautzen 2003. および同じ著者の Das Rahmenübereinkommen des Europarats zum Schutz nationaler Minderheiten und die Minderheitenpolitik in der Lausitz. Bautzen 2005.が小冊子ではあるが参考となる。
- 50) Kirchliches Amtsblatt für das Bistum Dresden-Meißen 7. Jahrgang, Nr.11. Dresden, 18.Juni 1997. Vertrag zwischen dem Heiligen Stuhl und dem Freistaat Sachsen. この協定のArtikel 10にはこう書かれている。「カトリック教会はカトリックによって特徴づけられたゾルブの文化財を保持しかつ保護する。自由州 (国) はこれに関してその可能な範囲において支援する。」
- 51) その証拠として現在でもゾルブの人々のあいだでは犯罪が極めて少ないことがあげられるという。(作家Benó Budar氏の発言) なおBudar氏の発言の正当なことは弁護士Tilman Schwenke氏提供の資料 [LKA Sachsen PKS 2004, 2.1 Bekannt gewordene Fälle, 2.1.3 Räumliche Verteilung der Kriminalität] によって証明される。この資料はこの民族の特質を裏付けるものとして、きわめて興味深い傍証となろう。
- 52) Sorbischer Schulverein e. V. (Hrsg.) :Ich kann ZWEI Sprachen, Zweisprachigkeit - ein natürlicher Reichtum der Lausitz, Görlitz 1998. 参照。
- 53) Edmund Pech, Dietrich Scholze (Hrsg.) :a.a.O., S.210.
- 54) Měrćin Salowski:Na slédach biskopa BENA Wobrazy z katolskich Serbow, Bautzen 1993, S.166-167.

参考文献

- 1 . Birgit Mitzscherlich:Diktatur und Diaspora, Das Bistum Meißen 1932-1951, Paderborn 2005.
- 2 . Ines Keller:Sorbische und deutsch-sorbische Familien, Drei Generation im Vergleich, Bautzen 2000.
- 3 . Rudolf Kilank:Die sorbische Priesterkonferenz im 20. Jahrhundert, Eine Dokumentation, Bautzen 2002.
- 4 . Ulrich von Hehl/Christoph Kösters (Bearb.) :Priester unter Hitlers Terror, Eine biographische und statistische Erhebung, Band I u.II, Paderborn 1998.

付記

本稿を書くに当たって次の諸氏に資料収集等でご協力を頂き、また面談の機会を与えて頂き、さらに有益な助言を頂戴し感謝申し上げます。

畏友Rolf Schwenke氏、Michał Nawka神父、Stephan Delan神父、ゾルブ研究所Ludmila Budarjowa女史、作家Benó Budar氏、ドレーズデン - マイセン司教区文書館Birgit Mitzscherlich博士、弁護士Tilman Schwenke氏